

オレ様狂想曲

M a k o t o & K a z u k i

佐々千尋

Chibiro Sasa

eternity



エタニティ文庫

目次

オレ様狂想曲

5

書き下ろし番外編

本当に欲しいもの

363

オレ様狂想曲

冗談でしょ、これ……

高校を卒業してから約二年、週四日アルバイトしていた総菜屋を、私は呆然と見上げた。いつもなら早朝から開いているはずのシャッターは閉じたまま。ちょうど真ん中あたりに、「閉店しました」と殴り書きされたコピー用紙がガムテープで貼りつけられていた。立ち尽くす私を遠巻きに眺め、ご近所の奥様方が噂話をしている。

「借金で首がまわらなくなって、夜逃げしたらしいわよー」

「ご家族で？」

「そうそう。昨夜、店の前にトラックが停まっていたのを、うちの主人が見たって」

そこでわっと声が上がった。

奥様たちは口々に「イヤー」とか「ウソー」とか言っているけど、そう言いたいのは私の方だ。

経営がかたむいていることには前から気づいていた。二年近く働いていれば、売上がどれだけ落ちているか嫌でもわかってしまう。それでも店員を見捨てて逃げるとは思っていなかった。うしろから、また新たな声上がる。

「あの子は？」

「ほら、（こ）で売り子をしていたじゃない。江坂えさかさんのところの娘さんで、真琴まことちゃんよ」

「まあ……可哀相にねえ……」

言葉とは裏腹に興味本位の嫌な視線が背中に突き刺さる。

「見るな」と喚わめき散らしてやりたかったけど、小さい町でそんなことをしたら、実は昔ヤンキーだったとか、根も葉もない噂を流されるに違いない。

注目の的になつていることに耐えきれなくなった私は、結局、何も言わずにその場を逃げ出した。

これから、どうしたらいいんだろう。

嗜好きな奥様方から見えない位置まで移動して、溜息をついた。

こういう時どこに相談したらいいのか、さっぱりわからない。

市役所かハローワーク？ それとも弁護士さんにお願ひするとか？

……どこに行っても門前払いされそうな気がする。

大体、弁護士を頼むお金があるなら、安い時給のアルバイトなんてしていない。それにしても夜逃げとは、ひどい裏切りだ。昨日までの給料をもらってないのに！正直なところムカついてしかたなかったけど、どこへ逃げたのかわからない状態ではどうにもできない。もちろん電話も通じない。

店の経営はいいかげんだったくせに、夜逃げの時は徹底してらってどういうことよ。私はイライラした気持ちのまま、通勤用の自転車に跨り、強くペダルを踏み込んだ。軋んだ音を立てながらスピードを上げていく自転車で、商店街を走り抜ける。行くあてなんてない。ただ悔しくて腹が立って、じっとしていられなかった。

シャッター街と化している商店街を端まで進んだところで、見慣れた車が路駐されていることに気づいてブレーキをかけた。

総菜屋だけでなく私はコンビニのアルバイトも掛け持ちしている。そのオーナーの車だった。

車の脇に建つ、無駄に立派な石造りの建物を見上げる。

「……商工会」

自分の口から漏れた言葉にハツとして、急いで自転車を降りた。

町の商工会なら、夜逃げされた時の対応を教えてくれるかもしれない。もしくは社長の逃げた先に、心当たりがあるかも……！

自転車を停めるのもどかしく、商工会の入り口へ駆け出す。ドアに手をかけようとしたところで、内側から押し開けられた。

「わっ！」

ドアにぶつかりそうになった私は、とっさに仰け反る。

中から出てきた男の人がぎょっとして目を剥いていた。

「え……って、真琴ちゃん!？」

啾然として私を見下ろしているのは、コンビニのオーナーだった。

好々爺こうこうやとして感じの優しい表情に胸が震える。知り合いの顔を見たことで緊張がゆるみ、思わず泣きそうになってしまった。

「ううっ。オーナー、聞いてくださいよ……」

「えっ。ど、どうしたの。急に」

会うなり泣き言を口にした私に、オーナーがオロオロしている。

困らせるのは申し訳ないと思うけど、とても胸に収めておけない。

「働いていたところの社長が夜逃げしたらしいんです。昨日の夜中に」

「ええっ！ あの総菜屋さん？」

オーナーの質問に大きくうなずく。

「そうですよ！ 今まで働いたぶんの給料とか、どうなるんですかー、もーっ」

やり場のない不安な気持ちを吐き出す。オーナーは私に憐れみの視線をよこした。「それはまた、しゅうじょう秋傷あきやうさまたねえ。当事者が見つかからないことには何もできないだろうし」オーナーの言葉が、ただでさえ弱った心をさらに抉る。

「しょ、商工会とか、労働基準法とかで、助けてくれないんですか!？」

「商工会でそういう補償はしていないんだよ。まあ元々あの総菜屋さんは加盟してないけど。法律のことは僕にはわからないなあ」

よろけた身体を支えるために、近くの壁に寄りかかる。オーナーが疲れたように溜息をついた。

「しかし、夜逃げとはねえ。バブルが弾けるまでは、こころこころも活気があつて栄えていたのに」景気が良かった頃を知るオーナーは、寂しそうな表情で東側に伸びる商店街と、その先に広がる海を見つめた。

「真琴ちゃんが生まれる前は、こころこころも山の別荘地のお客さんでにぎわっていてね。とても羽振りが良かったんだよ」

還暦をとうに過ぎたオーナーは、こうしてよく昔の話をしたがる。

アルバイト中に何度も同じ話を聞いていたけど、私はまたうなずいて、海とは反対側、町の西側にある山を見上げた。

小高い山の中腹から山頂にかけて、別荘地が広がっている。

バブル景気の頃は海と山があるおかげで人気を博したようだけど、今では空家と売地ばかりだ。

当然、別荘にくるお客さん目当ての商売は廃れ、観光業に頼っていた町の財政は、かたむいたさき戻っていない。今では財政破たんすたの噂まで、ささやかれていた。

……その余波を受けて、総菜屋も潰れちゃったんだらうけど。

肩を落として、ふうつと息を吐く。もう一度、煌めく海原へ目をやった。

海と山と、昭和の風情を残している鄙びた漁師町。見た目はそう悪くない。でも、それだけ。

生まれ育った町の現状は、まるで私の未来を暗示しているようだった。

結局どうにもできない私は、自宅に戻った。

別荘地のある山の登り口に私の家は建っている。

生垣で囲った敷地の前に「有限会社 江坂別荘管理」と書いた看板が設置されている。

長年潮風にさらされ錆さびの浮いた看板を一瞥した私は、自転車を停めるために車庫へ向かう。

車庫の扉を開けると、そこにはお父さんが普段使っている軽トラがあつた。

お父さんの本業は別荘地の管理だけど、不況で管理する別荘が減ってしまったから、

今は森林組合の臨時職員として伐採ぼくさいの手伝いをしている。

悪天候の時は仕事が中止になるけど、今日みたいな天気の良い日に早く帰ってくることは珍しい。

……総菜屋が夜逃げしたのをどこから聞いて、心配で帰ってきた、とか？

そこまで考えた私は脳裏にお父さんの姿を描いて、ありえないなと首を振った。

町自体が小さくて誰も彼も顔見知りだから、噂話が伝わるのも早い。けど、お父さんだけは別だ。

良く言えば大らか。身内の率直な意見を言わせてもらえば、大雑把おおざっぱでちよつとほんやりほんやりしていて、噂や流行にひどく疎まい。

どうしてこんな時間に帰ってきているのか不思議に思いながら車庫を出て、家の玄関扉を開ける。

ただいまと言うより早く、奥の方から話し声がしているのに気づいて、耳をそばだてた。お客さんがきているような気配はないし、玄関にあるのはお父さんの長靴のみ。

聞こえるのがお父さんの声だけということからも、どこかに電話をしているんだとわかった。

邪魔をしないように、そっと中に入って仏間へ向かう。

奥の小さな仏壇と、一緒に置いてある写真立てに手を合わせた。

「ただいま。お母さん」

中学の時にお母さんが病気で亡くなってからというもの、帰ったらまずこうして仏壇に挨拶するのが習慣になっていた。

いつもは、りんを鳴らすのだけど、お父さんが電話中だから止めておく。結構響くんだけね。

ふと写真の中のお母さんと目が合う。

優しい笑みをたたえた顔を見た途端、不安な気持ちさが口をついて出た。

「あー、困った。来月からどうしよう」

とりあえず帰ってきたものの、何も解決していないことに変わりはない。突然、失業したという事実が重く押ししかかってくる。

コンビニのアルバイトがあるから収入が全部なくなるってことはないけど、それだけじゃ貯金ができない。管理栄養士を目指して学費を貯めている最中の私には、痛すぎる事態だ。

管理栄養士への道は色々あるけど、就職のことを考えて家政学部のある大学に入りた
いと思っている。条件に合う大学への進学を目指して、貯金と勉強を頑張っていたの
に……

急に身体から力が抜ける。何も考えたくなくなつて、畳の上に寝転がった。

本当は仏間でこんなふうにならなく寝そべるなんていけないことなんだろうけど、自分でもありえないと思うほど落ち込んでいるから、今だけは許してほしい。目をつぶり、お母さんとご先祖様一同に心の中で謝った。

すり切れた畳のささくれが頬にチクチク当たる。張り替えてから何年経ったのかを考えていると、廊下に面した襖が引き開けられる音がした。

「うおっ!? ど、どうした、真琴」

目を開ければ、廊下に立つお父さんが私を見つけて、ぎよっとしている。電話は終わっ
たらしい。

「お父さん……」

横になったまま発した私の声は、悔しさを表すように震えてしまっていた。

茶の間に移動して、朝からの顛末を事細かく興奮気味に話して聞かせたけど、お父さんの感想は「ほほう」という一言だけだった。

鷹揚おうようというか、なんとというか……

大きな心でなんでも受け止めてしまうお父さんの性格には、時々ひどくイライラさせられる。

「つて、娘がひどい目にあってるのに、それだけ!」

「うーん。まあ、大変と言えば大変だが、身体が健康ならなんとかなるだろうさ」

くったくなく言い、のんきに笑うお父さんを前にして、私はがっくりとうなだれた。

寂れまくっている財政破たん寸前の町で、新しいアルバイト先を探す苦勞を少しはわかってほしい。若くて健康なら仕事があるなんていうのは、景気が良かった頃の幻想だ。「こんな田舎で簡単に仕事が見つかるわけないでしょ。お父さんだって、別荘の管理の

方はほとんど失業状態じゃない! 森林組合だって給料が少ないし」
イラつく気持ちをぶつけるように、つい、いじわるな指摘をしてしまっ

た。お父さんは私の嫌みに気づいていないのか「まあなあ」と言いながら、また笑った。

こういう時、病床のお母さんから「お父さんを助けてあげてね」と頼まれたことを思い出す。まだ中学生の娘と生活能力の低い夫に、余命いくばくもないお母さんはさぞ気を揉んだことだろう。

思わず溜息が漏れる。

とはいえ、ここでグチつてる暇があるなら、今すぐ仕事を探しに出かけるべきなのかもしれない……無理にでも気持ちを切り替えた方が楽なこともあるから。

夜逃げされ、結果的にタダ働きさせられたことは、とっとと忘れよう。

悔しくて前に進むことで見返してやると決め、立ち上がると、向かいに座っている

お父さんが私をじっと見つめていた。

「なに？」

さっきの嫌みに今さら気づいたのだろうか。

お父さんは珍しく考え込むそぶりを見せて、顎を撫でた。

「いや。仕事が見つからないというなら、お前に手伝ってもらおうかと思つてなあ」

「え？」

「実は別荘管理業の方で働ける人間を探してほしいと言われているんだよ。さつき連絡がきて、とにかく早い方がいいと言うから困っていたんだ」

お父さんが早く帰宅していたことと、さっきの電話を思い出す。どうやら、その話をしていたらしい。

「そりゃ、働かせてくれるところがあるなら嬉しいけど、私にできるの？」

別荘の管理は、庭の手入れや設備の点検、見まわりが主な仕事だ。

お父さんと違って庭仕事や機械に不慣れな私でも務まるものなんだろうか。

私の心配をよそに、お父さんは大きくうなずいた。

「ああ、大丈夫だ。お前は母さんに似て、料理上手だからな」

根拠はないけど、薄らと嫌な予感がある。

「料理って……一体なんの仕事なの？」

おそろおそろ訊き返した私に、お父さんはにっこりと笑った。

「うん。メイドだ」

一瞬、何を言われたのかわからずに、ぼかんとしてしまふ。まばたきも忘れてじっと

お父さんを見つめてから、口を開いた。

「は？」

「つまりだな、別荘に滞在する予定のお客様がメイドをつけてほしいと言つてて」

「はああ!？」

お父さんの説明を遮るように声を上げる。

蒼褪める私の脳裏には、テレビで見たメイド喫茶の映像が再生されていた。

はつきり言つて、メイドなんて嫌。

本物のメイドを見たことはないけど、テレビに出てくるようなフリフリのエプロンドレスを着て「お帰りなさいませ、ご主人様」とか言わされるのを想像しただけで、恥ずかしすぎて全身に鳥肌が立つ。

どう考えても無理だと拒否すると、お父さんは通いの家政婦みたいなものだと言い直し、別の仕事が見つかるまでの繋ぎでもいいからと食い下がってきた。

まあ、確かに呼び方が違うだけで求められるものは家政婦と同じなんだろうし、普通

に考えてメイド服とご主人様の組み合わせになるわけない……多分。娘の目から見ても呆れるほどぼんやりしているお父さんだけど、お母さんが亡くなったあと、必死で私を育ててくれたことを考えれば、助けてあげたいと思う。それに、ここで私が断って別の人が見つからなかったら、管理人としての信用にもかわる。

森林組合の給料だけでは生活できないから、微々たるものでも別荘管理の収入が途絶えるのは、私が働き口を一つ失う以上に大問題だった。

散々お父さんと話し合い、悩んで、最終的に私はメイドの仕事を引き受けることにした。もしメイド服を強要されても絶対に断ると宣言して。

翌日。先方から昼過ぎにきてほしいと言われた私は、少し早めに勤め先となる別荘へやってきた。

勝手に入っつていいと言われていたから、お父さんに借りた鍵で門を開け、屋敷の前まで進む。

扉の前で足を止めて、近くの住民から「緑風館」と呼ばれている建物を見上げた。

詳しい由来は知らないけど、屋敷の持ち主である東京の資産家、久留宮家の数代前のご当主が戦前に建てたものらしい。

当時にしては珍しい総二階建ての洋風建築で、有名な外国人建築家が設計したという。このあたりが別荘地になるよりもずっと前からある屋敷は、町のシンボルのようになっていた。

真四角の大きな白い建物に、深緑色が印象的な三角屋根が乗っている。

しっくい壁に、やはり深い緑色の木枠のフランス窓が整然と並び、同じ色で塗装された木製の玄関ドアが東側についていた。

南側には庭へせり出すように半円形のテラスがあつて、手すりから柱、雨どいに至るまで細かい彫刻が隙間なく施されている。

とにかく美しくて繊細で優雅。

外国の古城のように尖塔とかがあるわけじゃないけど、ロマンティックな洋館で、子供の頃は絵本に出てくる王子様やお姫様のような人が住んでいるんだと勝手に思っていた。

出掛けにも確認した自分の姿を、もう一度見てみる。

町の量販店で買った普通の長袖シャツにデニムのガウチョパンツを合わせたけど、普段着でいいと言われているし、おかしくはないはず。

携帯ミラーを取り出して覗き込めば、茶色の長い髪をポニーテールにした、可もなく不可もなくって感じの顔がこちらを見返していた。

私は少し緊張しながら、ドアの鍵を挿し込んでまわした。大きな音を立てて、鍵が外れる。

庭の手入れを頼まれたお父さんにくつついて敷地まで来たことはあるけど、建物の中に入るのは初めてだ。

そうつと開けて中を覗くと、薄暗い玄関ホールが見えたと同時に年月を経た木の香りを感じた。

「こんにちは……お約束をしていた江坂と申しますが、どなたかいらつしゃいませんか？」

静まり返っている室内に人の気配はない。一応、声をかけてしばらく待つてみたものの、誰も出てくる様子がなかった。

勝手に入れと言われても、具体的な仕事内容はここに来てから聞くことになっていた。お父さんは久留宮家の息子さんか滞在していると聞いていたけど……

どうにもできずに困り果てて近くを見まわすと、ドアの脇に呼び鈴らしきボタンを見つけた。

ドアを開けたままボタンを押してみる。

建物に合わせたようなレトロな鐘の音が、思っていたより大音量で響いた。

音の大きさに驚きつつ何度か鳴らす。少しして二階の方から物音が聞こえてきた。

「つたく、誰だよ。うるさい……」

どこかでドアの開く音と、男の人の声がある。

ほどなく玄関ホールの突き当たりにあるらせん階段を、ひよろりとした若い男の人が降りてきた。

私より五歳くらい上だろうか。

身長は普通だけど、ちよつと痩せすぎっぽい体型に、よれた黒いTシャツを着て、カーキ色のくたびれたコットンパンツを穿いている。

目にかかった真つ黒の前髪が、寝ぐせで大変なことになっていた。

色白というか顔色が悪いし、覇気のない表情のせいで整った顔が台なした。よく見たら爽やかなイケメンなのに、物凄く残念な感じ。

というか、この人、絶対に今まで寝てたよね……

内心で呆れながら目を向けると、だるそうな表情の彼と視線がぶつかった。

「アンタ、誰？」

愛想が少しも感じられない態度に、早くもここにきたことを後悔した。

けど必死に我慢して無理矢理、笑みを浮かべる。

「今日の午後にお約束していた江坂と申します。久留宮様はご在宅でしょうか？」

「ああ、家事を頼んでいた人か。ご在宅も何も、ここには俺一人しかいないし。とにかく

く入れば？」

「どうやら目の前の人が久留宮家のご子息らしい。

偉そうなところを除くと、お金持ちのお坊ちゃんらしさは全然ないけど。

久留宮さんは寝ぐせのついた頭をガリガリと掻き、さらに髪をぐちゃぐちゃにしてから左側のドアに向かって顎をしゃくった。

「……はい。失礼します」

本当は、まわれ右して失礼したいけど、お父さんと家計のことを思うとそうもいかない。私は顔に作り笑いを貼りつけ、こめかみを引きつらせながら彼に従った。

玄関ホールから左手のドアに入ると、庭に面した広い部屋に繋がっていた。

室内には明るい日の光が差し込んでいる。多分ここはリビングルームなんだろう。

全体が屋敷に合わせたアンティークな家具で統一されていた。

少しくすんだガラス製のシャンデリアと、テラスに続く大きなフランス窓。そこにかけられたシックなえんじ色のカーテン。

木製の猫脚がついたワインレッドのソファに、薔薇の模様が彫刻されているローテーブルのセットもあった。そして窓際の開けたスペースには黒いグランドピアノ……

まさにお金持ちの家だ。

入り口の近くに立っていると、久留宮さんは私を気にかけることなくソファにどっかと座った。

「アンタも座れば。えーと、名前なんだった？」

彼に真向かいの席を示され、一応お礼を言ってから座る。私の名前はさっきも伝えたし、素性も含めて事前にお父さんから聞いているはずなのに忘れてしまったらしい。

「江坂です。江坂真琴」

「いいかげん覚えてほしいという思いを込めて二度続けて名乗ったけど、久留宮さんはどうでもよさそうに浅くうなずいただけだった。

「ふうん。俺は久留宮一樹。ここを建てた爺さんのひ孫な」

「はい」

安物の服を着ている私以上に場違いな目の前の人を見つめる。

莫大なお金と手間暇をかけて建てた自慢の洋館に、こんなならしめない格好のひ孫が住んでいると知ったら、曾お爺さんが草葉の陰で泣くんじゃないだろうか。

呆れ混じりな私のまなざしには気づかず、久留宮さんは指折り数えながら仕事の説明を始めた。

「えーと、とりあえず俺の昼飯と夕飯の用意。それからこの部屋と台所、風呂、トイレの掃除。あと何かやってほしいことはあったかな……」

「朝ご飯はいらなんでしょうか？」
 食事の用意が二食分だけなのを不思議に思って訊くと、彼は今さら気づいたように眉を上げた。

「ああ、いらぬ。基本的に昼まで寝ているから朝飯は食べないし、アンタも昼にきてくれればいい。夕方から別のところでアルバイトをしているのも聞いている。掃除と夕飯の用意が終わったら勝手に帰ってくれてかまわない。でき上がってさえいれば、あとは自分でなんとかして食べる」

さつき起きたばかりなのも納得な生活ぶりだ。セレブっていうのはいつも身綺麗な格好できちんとしているものなんだろうと思っただけで、久留宮さんは違うらしい。

しかも昼まで寝ていて朝以外の二食必要というのは、つまり家から出る気がないってことだ。

仕事をしているのか知らないけど、二十代半ばで別荘に引き籠もり生活って……人生それでいいんだろうか。

説明を終えた久留宮さんは、私をまっすぐに見つめてくる。

格好のひどさはともかく、端正な顔を真正面から見返してしまい、私は少しだけドキッとした。

「他に質問は？」

「……あ、制服のことなんですけど」

「制服？」

久留宮さんは不思議そうに首をひねっている。

これだけは、はっきりと言っておかなければ。私は眉間に力を込め、彼をぐっと見据えた。

「私、絶対にメイド服は着ませんからっ！」

力みすぎたせいで、声が裏返ってしまった。私の宣言を聞いた久留宮さんは、口を開けてたつぶり数十秒ほどほんやりしたあとに、いきなり噴き出した。

「アンタ、何を言ってるんだよ。なんでメイド服？」

「えっ。だ、だって、メイドを募集してるっていうし、そういう格好をしろって言われたらどうしようかと……」

久留宮さんはソファの上で仰け反り、お腹をかかえて苦しそうに笑っている。

「やば、すげー笑える。本当にあんなの着せられると思っただけかよ」

「そ、そんなこと言われたって、実際のメイドなんて見たことないし、あの衣装を着るのが普通だったら嫌ですもん！」

バカにしたように笑われ、とっさに口ごたえしてしまう。

恥ずかしさと悔しさでうつつむくと、笑いすぎて疲れたらしい久留宮さんが長い溜息を

ついた。

「安心しろよ。そんな趣味はないから。ああ、でも、アンタがどうしてもって言うなら、俺のことを『ご主人様』って呼んでくれてもいいけど？」

「はあっ!？」

ぎよっとして顔を上げる。久留宮さんは狙いすましたように、すうっと目を細めた。

「冗談。でも名字じゃなくて下の名前で呼んでくれ。久留宮って言われてもピンとこないから」

「ご主人様呼びを強要されなかったことに胸を撫で下ろしつつ、彼の名前を思い返す。

さつき聞いたばかりだから間違うはずはないけど、万が一を考えて、そっと声に出してみた。

「えーと、一樹様、ですか？」

「様はいらない」

「いやないと言われても、雇い主を呼び捨てにはできない。

「じゃあ、一樹さん？」

一番、違和感のない敬称をつけると、彼はしぶしぶって感じに肩をすくめた。

「まあ、それでもいい」

まあって……。つくづく変わっている人だ。

2

資産家の息子でセレブなのに引き籠もり。アンティークの似合う古い洋館にいるにもかかわらず、着古したTシャツとコットンパンツ姿で、しかも寝ぐせつきだ。

お坊ちゃま育ちのわりに口調はぞんざいだし、偉そうなくせに「様」づけでは呼ばれないと言っし、何がなんだかさっぱりわからない。

寝ぐせで不自然な方向に曲がった前髪の向こう、だるそうに欠伸あくびをする一樹さんを見た私は、内心で思いきり首をかしげた。

海から吹き上がる風に背中を押されながら、必死で自転車のペダルを踏み込む。カゴの中に入っている荷物の重さと、上り坂の傾斜に負けた私は、みっともない唸り声を出して自転車から降りた。

「あーもー、本気でつらいっ。遠すぎるー!」

車が一台やっと通れるくらい狭い山道の途中、誰もいないのをいいことに大声で叫ぶ。

普段の移動を自転車に頼っている私には、緑風館への行き道が苦行と化していた。

海沿いの平地にある町から、少し山を登ったところに私の家はある。で、さらに数百メートル進んだところからが別荘地。

山頂へ向かって広がる別荘地のちょうど真ん中に、勤め先である緑風館は建っていた。まったく、久留宮家のご先祖は、どうしてこんな山奥に別荘をかまえたのか。今でこそ車があれば行き来は簡単だけど、緑風館を建てた当時は道路だつてちゃんと整備されていないから。

見たこともない一樹さんの曾お爺さんにまで、グチが出てしまう。メイドを始めて二週間、私の膝と腰は悲鳴を上げていた。

実に若者らしくない弱音を何度となく吐きつつ、緑風館にたどりついた私は、まだ二階で寝ているはずの一樹さんを起こさないうそつと中に入って、キッチンに立った。

時間どおりにきて仕事をしているだけなのに、昼ご飯がで上がる前に物音を立てて起こしてしまうと、安眠妨害だと嫌みを言われる。

昼に寝ている方が悪いと思つても、雇い主には逆らえなかった。

ここへくる前に町のスーパーで買った食材を冷蔵庫にしまう。

今日のメニューは、さよりの塩焼きに、人参とごぼうのきんぴら、なばなのクリームチーズ和え。あとは白いご飯と、汁物は茸のゆづめんにするつもりだ。

エプロンをつけ、袖を捲り上げる。下ごしらえからで上がりまでの作業手順を頭に

描いた私は、一度大きくうなずいて取りかかった。

でき上がったきんぴらと和え物を隣にあるダイニングルームへ運んで、またキッチンに戻った。

魚焼き用のグリルを覗き、薄く焦げ目がついているのを確認してから火を止める。このままグリルに入れておけば、一樹さんを起こして戻る頃には余熱で良い色になっているだろう。

私はざつと手を洗い、玄関ホールの奥にある、らせん階段を上っていった。

総二階建てで一階と同じ数の部屋があるのに、使っているのは南側の主寝室だけらしい。

メイドといつても、食事の準備と一階の掃除が主な仕事だから、二階には一樹さんを起こす時にしか上がらない。

静まり返った廊下を進み、寝室のドアを強めにノックする。間隔をあけて三度。最後のノックが終わったところで、室内から一樹さんの低い呻き声が聞こえた。

この声を初めて聞いた時は、急病で倒れているんじゃないかと心配した。でも、ただ寝起きが悪いだけらしい。常に寝不足で低血圧だから、ああして少しの間、夢と現を行ったりきたりしないと目が覚めないんだそう。

一体、何時まで起きているのかわからないけど、早寝すればいいのに。
唸り続ける一樹さんを無視して、私はさよりの焼き色を確認するために急いで階下へと戻った。

数分後、ちょうどすべての料理を出し終えたところで、ダイニングのドアが外から開けられた。

目を向けると、やっぱり寝ぐせをつけたままの一樹さんがぼーっと突っ立っている。

今日も黒いTシャツとカーキ色のコットンパンツ姿で。

一度だけうつかり見てしまった彼の洗濯カゴには、同じ色のシャツとパンツが何枚も入っていた。他の服が見当たらないところから考えて、あれはパジャマ兼用のホームウェアなんだろう。

「おはようございます」

時間は全然早くないけど、一応、朝の挨拶をする。

一樹さんは私に目もくれず返事もしないで、ふらふらしながらダイニングチェアにおさまった。

寝起きのうつろな目をした一樹さんの前で、汁椀から立ち昇った湯気が揺れている。彼がこの状態でしばらくぼんやりするのは常だから、その間に私はキッチンを片づけることにしていた。

一礼してキッチンへ戻ろうとすると、ふいに一樹さんが顔を上げる。続いて思わせぶりな視線を向けられ、私は首をかしげた。

「アンタって、料理だけは上手だよな」

「……はい？」

いきなりなんの話だろう。わけがわからずに眉を寄せる。

一樹さんは私の反応が気に入らなかつたのか、急にムツとして目をそらした。

「人が褒めてやったんだから、ちょっとは嬉しそうな顔しろよ」

「えっ。褒めてたんですか!？」
今ので？

思わず訊き返すと、彼は当然だとばかりに顎を上げ、ふんと鼻を鳴らした。

「他にどんな意味があるんだよ」

「いえ、『料理だけ』とか言うから、他の仕事に対する嫌みかなって」

掃除がいまいちなのは、自覚している。

私の答えを聞いた一樹さんは、いかにも納得したような顔でうなずいた。

「ああ、確かに掃除は下手くそだな。時間がかかりすぎだし」

はつきりと出来の悪さを指摘され、私は頬を引きつらせた。

固まる私を無視して、一樹さんは汁椀を手に取り一口すすする。それから、きんぴら

摘んで、ぽいっと口に放り込んだ。箸を使わないで。

「ん、うまい。料理の腕は自慢していいと思う」

摘み食いした指を舐めながら言うなって感じだけど、料理を褒められるのはかなり嬉しい。

なんだか照れくさくて、エプロンの端をギュッと握り締めた。

「あ……ありがとうございます」

「別に本当のことだから礼はいらない。アンタ、調理師とか向いてそうだな」

話の流れから出た、ただの雑談でも「そうですね」とは言えなくて、ゆっくりと首を横に振る。

適当に話を合わせておくのがいいのはわかっていたけど、私には他になりたいものが明確にある。うなずくとその夢を否定してしまう気がして嫌だった。

「あの、実は私、栄養士になりたいくて」

当たり障りのない話に反論されるとは思っていなかったのか、一樹さんはきよとんとしている。

「栄養士？」

「はい。管理栄養士になって、病気予防のための食事指導とかをしていきたいんです」
食事の手を止めた一樹さんに、じっと見つめられた。

「へえ意外だな。フリーターをしているっていうから、将来とか何も考えていないのか
と思ってた」

目下、引き篋もり中の人に言われたくないと思ってしまったけど、私と同じように、
一樹さんにもここへ篋もっている理由があるのかもしれない。

だらしな性格好と眠そうな顔でご飯を口に運ぶ彼を、そっと盗み見る。

何も考えてなさそうな様子に、やっぱりただ働きたくないだけなんだろうと思いつ
直した。

使ったお鍋やフライパン、一樹さんの食器まで全部片づけたあと、リビングの掃除に
取りかかった。

さつき下手だと言われてしまった手前、いつもより丁寧に掃除機をかけていく。

次に乾いたダスターでフローリングの拭き掃除を始めた。

家の床だったら埃取り用のモップで適当にやって済ませてしまっただけど、緑風館の
リビングは様々な形の高級家具があちこちに置いてあって、モップが入らないところも
多い。

結局、ダスター片手にしゃがみ込んで拭くしかなかった。

腰は痛いし、時間はかかるし、なんて非効率なんだろう。

内心で文句を言いながら少しづつ拭いていると、唐突とつとにドアが開いた。
「なあ、アンタさ……」

ドアの開く音と一樹さんの声に驚いて顔を上げる。

振り向きながら立ち上がろうとした私は、頭上の何かに額を強く打ちつけた。
ガツンという鈍い音が響くのと同時に、目の前に星が飛ぶ。

痛みよりも先に眩暈めまいがして尻餅をついた。

「いったあーっ！」

ズキズキする額を両手で押さえる。

ギュッと目をつぶり痛みをこらえていると、両肩に触れた何かに強い力で引き寄せられた。

「おい、大丈夫か!？」

間近から聞こえる一樹さんの声。

ハツとして目を開ければ、しゃがんだ彼に背中を預けるようにして抱かれていた。

あまりの近さに心臓が跳ねる。痛みも忘れて、慌てて飛びのいた。

別に彼を意識しているわけじゃないけど、これまで家族以外の異性に縁のなかった私には刺激が強すぎる。

「だ、大丈夫、ですっ」

「でも、すげー音がしたぞ。アンタの頭突きで、ピアノが持ち上げられたんじゃないかってくらい」

「えっ」

どうやら私はリビングのランドピアノにぶつかっただけ。びっくりしたのと、痛いので気づいていなかった。

すうっと血の気が引く。

見たところピアノはなんともなさそうだけど、どこかに傷をつけたとしたら……

「す、すみません！ 壊れてないですか？」

「は？ ピアノより自分の頭の心配をしろよ」

一樹さんのつつこみで、自分の額をさすってみた。小さいたんこぶはできてるけど、血は出ていないし、吐き気もない。痛みも段々おさまってきている。

「大丈夫です。私、石頭だし。それよりピアノに何かあったらどうしよう……こんなに綺麗なのに」

立ち上がり、黒く光る鏡面を見つめた。ピアノのことをよく知らない私にも、これかかなりの高級品だというのはわかる。傷んでいた場合の修理費を想像するだけで倒れそうだった。

一樹さんははっきりと呆れ顔をして、疲れたように息を吐いた。

「ピアノをへこますくらいの石頭なんてあるのかよ。まあ、どのみち弾けないやつだから、問題ないけどな」

「弾けないって……これ、置物なんですか？」

それにしては本格的な気がする。洋館に合わせるためとはいえ、こんな大がかりな装飾品まで置くのだろうか。

私がぼかんとしているのに気づいたらしい一樹さんは、少し首をかたむけ、何かを考えるように眉を寄せた。

「あー、正確に言うとは、弾けないことはない。ただ、長いこと調律をしていなくて……つまり調整するってことなんだけど、それをしないで音程が狂ったり、弾きにくくなったりしてるから、今は弾けないってこと」

「へえ。でも勿体ないですね、せっかくピアノがあるのに。弾けたら楽しそうじゃないですか？」

まだ小学生だった頃、友達の家にあったピアノが羨ましくて、買ってくれと親に駄々を捏ねたのを思い出した。

当時から収入の少なかつた我が家には無理な話で、両親をひどく困らせたのを覚えてる。

今さらピアノが欲しいとは思わないけど、こんなふうになだの飾りにしておくのは惜

しいし、ピアノも可哀相だ。

さつき私が額をぶつけたあたりを、そっと撫でる。艶やかな表面からは、使えない状態にあるなんてわからない。

「……アンタはピアノを弾けるのか？」

「いえ。習いたかったんですけど、ピアノ教室に行けなくて」

私は一樹さんの質問に苦笑いしながら首を横に振って答える。

ピアノ教室に通えないほど生活が困窮えんきつしていた、という理由は言わないでおいだ。

「それじゃ、弾いて楽しいかなんてわからないだろ」

「曲にならなくても、音が鳴るだけで楽しいじゃないですか。ピアノの音色って綺麗だし」

古い洋館の一室に響くピアノの音色……

私に雰囲気があって素敵だと思っけど、男性の一樹さんにはわからない感覚なのかもしれない。

何故か黙り込んでしまった彼を見ると、苦しいな表情を浮かべ、目を伏せていた。

「どうかしました？」

「あ、いや……急用を思い出しただけだ。部屋に戻る」

一樹さんはまるで言い訳でもするように早口でそう告げ、慌あわただしくリビングを出ていった。

離れていく彼の背中を見送った私は、ドアが閉まったのを確認して首をかしげる。いきなり、なんなの……？

結局、一樹さんがここにきた用事を訊けなかった。

ただぼんやりとドアを見つめていた私は、頭をぶつけたことを心配して助けてくれた彼に、お礼を言い忘れたと今さら気がついた。

お客様が来店したことを知らせるチャイムがコンビニの店内に鳴り響いた。

「いらっしやいませー」

ユニホームを身につけ、パツクジュースの賞味期限をチェックしていた私は、反射的に挨拶をして入り口を振り返る。

背の高い男性が立っていることに気づいて伸び上がってみれば、知った顔がこっちを見ていた。

「……で、なんだ、敬士けいしかあ」

私の態度に敬士は渋い顔をする。

「なんだってことはないだろう。いくら幼馴染おきななじみでも客は客だぞ」

もっともらしいことを言いながら、彼は腕を組んだ。背が高くガッチリしていて、短い黒髪をツンツンに立てているせいで、ちょっと威圧的に感じる。

今でも隣に住んでいて、子供の頃からずっと一緒にいる私には、敬士が見た目に反して凄く優しい人だとわかっているけど。

私の声に気づいたららしい店のオーナーが奥の事務所から顔を出す。入り口に立つ敬士を見つけた途端、顔をほころばせた。

「お。高田たかだくん、いらっしやい。僕は今ちょっと手が離せないんだが、ゆっくりしていいかね」

「はい。どうもです」

以前、奥さんがひどい風邪をひいて入院した時、看護師をしている敬士にお世話になったとかで、オーナーは彼を特別扱いしていた。

しかし、スピードと手軽さが売りのコンビニでゆっくりしていけというのは、どうなんだろう。

またオーナーが奥に引っ込んだのを見計らい、敬士が近づいてくる。彼は私の隣まできて、密かに苦笑いをした。

「感謝されんのは嬉しいけど、俺は自分の仕事をしただけなんだよな」

「いいじゃない、オーナーは奥さん命だし。それだけ立派な仕事をしてることでしょ」
敬士は私のフォロワーに肩をすくめた。

「そんな大層なもんじゃないって……あれ、お前それどうした？」

突然、話題が変わったことに驚いて敬士を見つめる。

「え？」

彼は、私の頭を指差した。

「額のどこ、赤くなって腫れてんぞ」

「ああ……今日、掃除してる最中におつけたの」

触らなければ痛くないから、ぶつけたことをすっかり忘れていた。緑風館での仕事と、たんこぶができた経緯を簡単に説明すると、敬士はあからさまに呆れた表情をした。

「お前、ちよつとは気をつけろよ。昔から落ち着きがないのは知ってるけど、もう二十歳なんだから」

家と家の間が一〇〇メートルくらい離れているけど一応お隣さんだから、敬士のことばは物心がついた頃から知っている。逆に四歳上の彼は、私を赤ん坊の頃から知っていた。

お互い一人っ子のため、幼馴染おきななじみというよりは兄と妹のような関係が続いている。こんなふうにならぶつたお小言をもらうのも、いつものことだった。

「うるさいなあ。もう」

わざとらしく口を尖らせ、そっぽを向く。敬士はまた苦笑いを浮かべ、私のポニーテールを掴んで、するんと撫でた。私を気遣ってくれる時の彼の癖だ。

「でも、大丈夫か？」

「ん。平気だよ。もうほとんど痛くないし」

本当に大丈夫だと、笑ってうなずいた。

少しだけ困り顔をした敬士は、人差し指で私の頭をトントンと突いた。

「お前の頭が岩並みに硬いのは知ってるから心配してねーよ。そっちじゃなくて、仕事のことさ。総菜屋の社長が夜逃げしたって聞いたぞ」

「あー、うん」

うちのお父さんほど疎いわけじゃないけど、噂話に興味がない敬士にまで夜逃げのことが伝わっていたらしい。

怒濤どたうの展開から二週間が過ぎ、やっと気持ちの整理ができてきた私は首を横に振り、明るく答えた。

「まあ、逃げられちゃったものはしかたないよ。それに新しい仕事もすぐ見つかったし。今の職場、前のところよりお給料が良いしね」

これ以上、心配をかけたくない。

実際、久留宮家からは、以前の総菜屋とは比べものにならないほど高い給料を提示されてきた。

別荘に住んでいる一樹さんは、はっきり言って偏屈へんくつで自分勝手な引き篋ひきかもりだけど、我慢できないほどじゃない。今では総菜屋の仕事がなくなると良かったと思っっているほ

どだ。

前向きな気持ちの私とは反対に、敬士は浮かない顔をして目を伏せた。

「でも、手伝いに行ってる別荘には、若い男が一人で住んでるんだらう。それってどうなんだよ」

「どうって、何が？」

親が金持ちとはいえ、引き篋^すもりの脛^{すね}かじりなんてダメだとも言いたいのだろうか。「あ、いや。まあ、その……」

いつもならなんでもはっきり言うのに、今日の敬士はいまいち歯切れが悪い。

しばらく、もごもご何かをつぶやいたあと、彼は「とりあえず、気をつけろよ」と言った。

「……うん」

なんだかさっぱりわからないけど忠告は聞いておく。でも何に気をつければいいんだらう？

ぼかんとする私の目の前で、敬士はそわそわと視線をさまよわせて続いていた。

3

緑風館の仕事は日曜祝日休みの、週六日勤務。

最初は、毎日山道を登るなんて耐えられないと思ったけど、一ヶ月が過ぎる頃には足腰が鍛えられたのか、それほど苦にならなくなっていた。

基本的に部屋に引き篋もっている一樹さんとは接点がありません、相変わらず彼の生活は謎だ。

その代わり仕事が中断するような頼み事をされることも少ないからやりやすいし、今では短時間で割のいいアルバイトとして納得していた。

すっかり慣れてしまった家事をいつもの順序でこなしていく。

昼食の用意に使ったお鍋を片づけた私は、一樹さんが食事を終える頃だと気づいて、食器を下げに向かった。

ダイニングでは、一樹さんがイスの背にもたれかかって腕を組み、難しい顔をしている。何か気に入らないところでもあったのだらうかと目を向けると、彼もこちらを向き、

眉間の皺^{しわ}をさらに深くした。

「アンタさ、アイスの買い置きとかしてないよな？」

「はい……？」

シリアスな表情とは合わない台詞に、思わずきよんとしてしまふ。

一樹さんは、私が理解していないことに苛立ったのか、ますます不機嫌そうな顔をした。

「アイスだよ。アイスクリーム」

「ないです。けど、なんでアイス？」

訊き返してから自分でも間抜けな質問だと思った。案の定、一樹さんが思いきり呆れている。

「食べたいから。アイスにそれ以外の使い道があるのか？」

「あ、いえ。すみません」

一樹さんの様子とアイスクリームが繋がらないのもあるけど、今まで間食しているところを見たことがなかったから、余計に驚いてしまった。

彼はアイスに寄りかかったまま、ぐうっと伸びをして、溜息をついた。

「ないなら、いい。すげー食べたってほどもないし」

目をそらして、ぼそぼそと諦めの言葉をつぶやく一樹さんが、何故か可哀相に見えてくる。

アイスの買い置きをしていなかった私が悪いような気までできてしまった。

「えと……買ってきましようか？ あ、でも四十分くらいかかりますけど」

提案してから、慌てて時間を言い添える。真夏じゃないし、保冷剤と保冷バッグを貸してもらえば買いに行くのは可能だけど、自転車でここから町へ下りて戻ってくるには、かなりの時間が必要だ。

姿勢を正した一樹さんに、まじまじと見つめられた。

「この町ってそんなに田舎なのか？ アイスを買うのに四十分とかありえないだろ。アンタ、よく普通に暮らしてられるな」

「えっ、違います。お店は普通にありますけど、自転車で行くから時間がかかるだけで……」

何か勘違いしているらしい彼に向かって両手を振った。

「はあ？ なんで自転車できてるんだよ。車の免許も取れないくらい頭が悪いのか？」

「なっ、免許は持ってますっ！」

思いきり失礼なことを言われ、憤慨する。

田舎に住んでいると、どうしても車を運転しなきゃいけない時もあるから、十八歳になってすぐに免許は取得していた。今のところ身分証代わりにしか使っていないけど。

一樹さんはわけがわからないという顔をして、首をひねった。

「なら車でくればいいだろ。交通費はうちが全額支給するって言わなかったか？」

「そうじゃなくて、自分の車を持っていないんです。ガソリン代に、保険とか税金とか、凄くお金がかかるから」

車そのものを買うお金ももちろん惜しいけど、そのあとの維持費が高すぎて、今の私には手が出ない。自転車で移動するのがつらくても、車に使うお金を大学進学資金にまわしたかった。

「なんだそりゃ」

自転車通勤の理由がお金だとは思っていなかったのか、一樹さんは唖然あぜんとしている。由緒ある資産家の御曹司な彼には、大学の進学費用がなく、車も買えないほどの貧乏なんて想像がつかないだろう。

私は大きく息を吐いて、この町の状況とうちの経済状態を説明し始めた。

どこまで理解してもらえるかはわからなかったけど、一樹さんは私の話を最後までちゃんと聞いてくれた。

「つまり、栄養士になりたいけど、アンタの家が超貧乏で大学に行く金がないから、ガソリン代をケチって貯金をしてるってことか？」

間違っただけでもない、超貧乏とか、ケチとか言われるのは釈然しゃくぜんとしない。私は胸の内のモヤモヤをなんとかやりすごし、うなずいた。

「まあ、そんな感じですよ」

「ふうん。金がないのも大変なんだな」

まるで裕福な方が苦勞をするとも言いたげな台詞せりふに、引くかかる。別荘で悠々自適な生活を送っているのを見る限り、困り事があるとは思えないけど……

一樹さんは何か感じ入るところでもあったのか、物憂げな顔で窓の外を見つめている。声をかけづらい雰囲気、私も黙って庭へ目を向けた。

そうしてしばらくぼんやりしていたけど、夕方からコンビニのアルバイトもあるし、あまりのんびりしてられない。

「……あの、それで、買い物をしてきた方がいいですか？」

「え？」

声をかけると、一樹さんは何を言われたのかわからないというふうに、きよとんとししていた。

「アイスを食べたいって言っていたから」

「ああ。いや、いい。どうしても食べたかったわけじゃないんだ」

力なく首を振り、彼はまた外へ視線を向ける。さっきまではいつもとどおりだったのに、何故か急に元気をなくしていた。

偉そうだったり、失礼なことを平気で言ったり、いきなり落ち込んだり……やっぱ

へんなの。そういえば、彼はどうしてこの別荘で暮らしているんだろう。何か事情があるのかな……？

どこか遠くを見つめている一樹さんの横顔を目にした私は、彼がこんな山奥に引き籠もり続ける理由を詮索してしまっていた。

次の日、私はいつもより重い自転車に四苦八苦しながら緑風館の門をくぐった。

一度立ち止まり、深呼吸をして自転車を見る。前のカゴには昼食と夕食の材料、うしろの荷台には保冷ボックスが括りつけてある。

保冷ボックスに詰めてあるのは色々な種類のアイスクリーム。一樹さんの好みは知らないけど、これだけあればお気に召すものがあるはず。

私は荷物の重さで軋む自転車を気にかけて、建物の入り口に向かった。

門から続く道を行くと、いつもは閉じられているガレージのシャッターが開いていて、中に白い軽自動車があった。

一樹さんは車を持っていないようだから、誰かお客様がきているんだろう。

初めてのことに思わず車へ目を向けた。比較的新しいけど、なんの変哲もない軽自動車。内装に装飾もないし、どこかの企業の社用車かもしれない。

私は車を尻目に自転車を停めて保冷ボックスを外し、緑風館の玄関先まで運んだ。

来客中の一樹さんに迷惑をかけないように、そっとドアを開ける。

室内はいつもどおり静まり返っていて、不思議に思った。

キッチンの冷凍庫にアイスを移した私は、次にするべきことを考えた。

お客様がお見えならお茶を出した方が良さだろうし、普段どおり昼食を作っているのかも訊かなければならない。

食に携わる職を志す者として、たとえ一食分でも料理が無駄になるのは避けたかった。人の気配はしないけど、この屋敷でお客様を通せるのは多分リビングだけだ。

緑風館はキッチンとダイニングを除いて全部で十四室あるそうだけど、一階南側のリビングと、その真上の主寝室以外は使っていない。

建物全体が古くて使い勝手が悪いから、一樹さんが引き籠もるまでは家族が訪れることも少なかったらしく、北側の部屋はほとんど物置になっていると聞いた。

できるだけ邪魔にならないようにと気をつけながら、リビングのドアの前に立つ。

重厚な木製のドアをおそるおそるノックした。そのまま少し待ってみただけ中からの返事はない。

「失礼します……」

一声かけてドアを開ける。覗き込んだ室内には、振り子時計の音が響いているだけ。

最初の日に一樹さんと面接のようなことをしたソファセットには、誰も座っていない

かった。

思わず首をひねる。ここでなければ、どこにいるんだろう。

物置同然の部屋に用があるとは考えにくい。とすると、一樹さんの寝室？

気難しい一樹さんが、ただの知り合いを部屋に招き入れるはずがない。たとえば、家族や友人、恋人……。そこまで考えた私はハッとした。

もし一樹さんに恋人がいて、その彼女が今、彼のところにいたらどうしよう。寝室にいるっていうのは、つまり、そういうことで……

実際に恋愛経験はなくても、いろんな人から聞いた下世話な話の数々が頭の中を駆けめぐる。

ドアレバーを握った手が震え、顔が熱くなった。

「おい。なんでそんなところに突っ立っているんだ？」

「ひゃああっ!？」

突然、うしろから声をかけられ飛び上がる。自分でもびっくりするほど、おかしな声が出た。

慌てて振り返ると、いつもの寝起き姿の一樹さんが目を丸くしていた。

「なんだよ？」

驚きとさっきの妄想のせいで、すぐには言葉が出てこない。

ただオロオロするばかりの私は、震える唇から意味を成さない音を吐き出した。

「あっ、や、いや、なん……」

「大丈夫かよ。アンタすげー変だぞ。顔も赤いし、熱でもあるのか？」

眉を寄せた一樹さんが、私の方に手を伸ばしてくる。心配してくれているのはわかっていたけど、彼の指が額に触れる直前、あからさまに身体を震わせてしまった。

「ちがつ、違います！ ぜ、全然、平気ですからっ、ホントに！」

とりあえず大丈夫だと伝えたくて、思わず大きな声で喚く。背中を壁に張りつけて横歩きで移動し、一樹さんから距離を取った。

私の態度が気に入らなかつたのか、不機嫌な表情を浮かべた一樹さんはスッと目をさがめる。伸ばしかけた手を元に戻して、つまらなそうに鼻を鳴らした。

「アンタみたいな女をどうにかする気なんてない。自転車でここまできてるっていうから、熱中症でも起こしたんじゃないかと思っただけだ」

あ……

ちくんと胸の奥に痛みを感じる。一樹さんが何を言っているのかはいまいちわからなけれど、「アンタみたいな女」っていうのが悪い意味で使われたことは間違いない。

雇い主と使用人なんだから特別に良く思われる必要もないのに、何故か心が締めつけられた。

目を伏せた私は、そのまま頭を下げる。

「心配をおかけして、すみません。あと、来客の邪魔をしたことも……」

「客？ そんなのさてないぞ」

「えっ。でも外に車が停まっていたよ？」

なんだか微妙に話が繋がらない。

顔を上げて一樹さんを見つめると、難しい顔で少し考え込んでから、がく合点がいったと

ばかりにパッと眉を跳ね上げた。

「ああ。あれは東京の家から持ってこさせたんだ。使っていない車があるっていうから、

アンタが乗ればいいだろうと思っただけ」

「へ？」

想像もしていなかった話に、つい間抜けな声が漏れてしまう。さっき外で見た軽自動

車は久留宮家の本宅のもので、それをわざわざ持ってきてくれたらしい。

もしかして昨日、私が自転車通勤していると聞いたから……？

ぽかんとする私を見た一樹さんが、また顔をしかめた。

「うちの車じゃ不満なのか？」

「あ、いえ、そうじゃなくて。なんだかびっくりすぎて、いいのかなって」

あまりにも待遇が良すぎて現実味がない。

久留宮家の別荘で働いているとはいえ、本当に借りていいのか、ためらってしまう。

一樹さんはいつものように、皮肉っぽい笑みを浮かべた。

「アンタにはわからないだろうけど、要は税金対策で車を所有しているんだよ。どうせ誰も乗っていないんだし、気にしないで使えばいい。ガンリン代は通勤手当として出すから全額申請しろ。申請不備はうちの経理担当につっこまれるからな。あいつは本気で怖えぞ」

「え……」

そんなことを言われたら、借りるのをお断りしたい気持ちになる。

どうしたらいいのかわからずに眉を八の字にすると、一樹さんに思いきり笑われた。

「とりあえず遠慮するなっただ。あと特別に夕方のアルバイトの通勤にも使っている。その代わり俺がアイスを食べたくなったら、すぐに買ってこいよ。アンタは俺の使い走りだからな」

アイズが大好きでしかたないというような言い方に、笑いがこみ上げる。

多分これが一樹さんなりの優しさなんだろう。口が悪いし、凄くわかりにくいけど。

「でももう、冷凍庫の中はアイズでばんばんですよ？ 今日、買ってきちゃったから」

「は？ 確かにすぐって言ったけど、早すぎるだろ」

一樹さんのつつこみに、声を立てて笑う。

さつきは突き放されたように感じたけど、また彼に近づいた気がして、私は胸を撫で下ろした。

4

初夏の午後、青空の下で弾ける雫を見つめる。
ホースヘッドからシャワー状に飛び出す水滴は、太陽を反射してキラキラと光っていた。

手元から目を離して、眼前に広がる庭を見渡す。

澄んだ空と目に痛いくらいピッカピカの太陽。遠くに見える人道雲。ゆるく傾斜のついた、だだっ広い庭には一面に芝が敷かれている。

まさに緑のカーペットみたいな芝生に、水を撒いていく。

屋敷から離れたところはタイマー式の自動スプリンクラーが設置されているけど、人が歩く可能性のある場所には、あえて置いていないそう。たまにしか訪れない家族の誰かが、水の出る時間を忘れて、ずぶ濡れになってしまったことがあり、撤去したらしい。一樹さんがここに引き籠もるまでは、別荘管理の一業務としてお父さんが芝の手入れ

をしていたけど、今は家事のついでに私が水を撒いていた。

噴き出す細かい飛沫が気化して、あたりに漂っている。光の屈折で虹のように光る霧に包まれた私は、ほうつと息を吐いた。

「……きれーい」

様々な色の光が、美しい建物と鮮やかな芝に映える。仲の良い友達や敬士から「二十歳とは思えないほど現実的な性格」と言われる私でも、ロマンティックな気分になった。この庭と屋敷を見た幼い頃の私が、緑風館には王子様とお姫様が住んでいるんだと思っ込んだのも無理はない。

七色のものやのなかで、私の耳がかすかに響くピアノの音を捉えた。途切れ途切れに聞こえてくる繊細で澄んだ音色。

不思議に思ってたあたりを見まわすと、リビングルームのピアノの前に一樹さんが座っていた。

一樹さんが、弾いているの……？

窓がしっかり閉められているから、本当に弾いているのか、CDとかをかけているのかはわからない。ただ鍵盤のあたりに置かれた彼の手が動いているのは、外からでも確認できた。

耳に届くピアノの音が、心の琴線を震わせる。私は息を詰め、彼を見つめた。

一樹さんから目が離せない。

ピアノに向かう彼の姿は、いつものだらしない格好が気にならなくなるほど凜りんとして格好良かった。

いつの間にかホースヘッドを持つ手を下ろしていた。足元に水たまりができていく。何もできずに、ただ果然と見つめ続けていると、いきなりボタンと音が止んだ。

窓ガラスの向こうの一樹さんがおもむろに立ち上がる。何かに困っているようにガリガリと頭を搔かいてから、勢いよく窓を開け、テラスに出てきた。

「アンタ、どこに水を撒まいているんだよ」

私に向けて放たれた声にハッとすると。握りっぱなしだった手元のレバーを離して、放水を止めた。

「す、すみませんっ」

恥ちずかしい……水を止めることさえ忘れていたなんて。

ギョツと目をつぶって頭を下げると、深く溜息をつく音が聞こえた。

「いや、謝らなくていい。でもピアノが弾けるのなんて、そんなに驚くようなことでもないだろ。まあ、あんまり上手くはないけどな」

どことなく自嘲じちようめいた一樹さんのつぶやきに、慌あわてて顔を上げる。

素人の私に技術的なことはわからないけど、さっきの演奏は本当に素敵だった。

「そんなことないですっ。凄く良かったです！」

さっきの感動の余韻よゐんに浸ひたりながら、ほとんど叫ぶようにして言いきった。

私が熱く語ったせいとか、一樹さんはあからさまに面喰めんくらっている。

「……そりゃ、ドーも」

「あ。ご、ごめんなさい。つい……」

また恥ちずかしくなつて、うつむいた。気づかれないようこっそり一樹さんの様子を窺うかがうと、彼もそっぽを向いている。長い前髪に隠された横顔が、ほんの少しだけ赤いような気がした。

それにしても気まずい。どうしたらいいのかわからない微妙な空気が、私たちの間に漂ひらっている。

ピアノを弾いている時の一樹さんは見惚みとれるほど格好良かったし、彼の奏でる音色にも感動した。

素直に感じたことを告げただけなんだから、気にする必要はないはずなのに、恥ちずかしくて居たたまれない。

何か取り繕つくろう方法はないかとオロオロしていた私は、ここで働き始めてすぐの頃、ピアノに額をぶつけたことを思い出した。

あの時は、どうせ弾けないピアノだから問題が起きてもかまわないと言われた。でも、

さつき普通に弾いていたということは、あれから修理をしたんだろうか。

もしかすると私のせいで余計な修理費がかかったかもしれない。

「……ところで、あの、ピアノ大丈夫でしたか？ 私がぶつかったところとか」

急に不安になって一樹さんを見つめると、呆れ混じりのゆるい笑みを返された。

「だから、アンタの頭どれだけ硬いんだよ。前にも言ったけど、頭突きでへこむとかありえないから安心しろ」

「そうですか。良かった」

ほうっと息を吐く。あの綺麗なピアノを傷つけずに済んだことに胸を撫で下ろした。

手に持っていたホースヘッドを握り直す。それから仕事に戻るという意思表示のため頭を下げた。

「お邪魔して、すみませんでした。どうぞ続けてください」

目線を地面に向けたまま、一樹さんを視界に入れないようにして踵を返す。

ピアノを弾く彼の姿は目の毒だ。見てしまったら、何も手につかなくなる。

まだ水を撒いていないところへ向かおうとした私は、うしろから声をかけられた。

「あ。アンタさ、何か好きな曲とかある？ クラシックで」

「え？」

ふいに呼び止められたせいで、さつきの決意はどこへやら、思わず振り返ってしまった。

「まあ、希望を訊いても弾けるかわからないけどな。長いことやっていなかったから、指がすげー硬くなってるし」

窓枠に寄りかかった一樹さんは、指を組んで指の間を広げたり閉じたりしている。

彼の長い指が鍵盤を叩くところを想像し、変にドキドキした。

「あ、その……曲名とかは、よく知らないの」

「それなら、どんな感じの曲が好きか、教えてくれるだけでもいい。あとは勝手に色々弾くから」

「感じで言ったら、優しいの、かな」

自分の好みについて考えながらしゃべったため、敬語を忘れた。私の失礼な態度に気づかなかったのか、一樹さんは短く「了解」とだけ答えてリビングに戻ろうとする。

「あのっ！ なんて私のリクエストを訊くんですか？」

時間にも環境にも縛られない、自由人な彼のことだから、ピアノを弾いたことも単なる気まぐれなんだろう。私の希望を訊いたのだから、ただ気が向いただけに違いない。

返ってくる答えなんて簡単に想像できるのに、私は何故か彼に尋ねていた。

リビングに戻りかけていた一樹さんは、顔だけをこちらに向け、ニヤッと口の端を上げた。

「アンタの好みの曲を弾けば、下手くそでもさつきみたいに睨まれたりしないだろ」

「なっ。睨にらんでません！」
 とつさに反論すると、一樹さんはカラカラと笑いながらピアノのところへ戻っていった。

なんなの、もう！

からかわれたことにムツとしながら、私はまた屋敷に背を向けた。

さつきとは違い、開放した窓の向こうから、はつきりとピアノの音が届く。

曲名は知らないけど、どこかで聞いたことがある優しい旋律せんりつ。

……本当に、なんなんだろう……

穏やかな曲調とは裏腹に、胸がひどく高鳴っている。

あいている方の手で触れた頬は、日差しの下にいますという理由では説明できないほど熱くほてっていた。

一樹さんがピアノを弾いているところを見てしまったあと、緑風館での仕事を終えた私は、落ち着かない気分のまま自宅へ帰ってきた。

いつもなら直接、次のアルバイト先へ行くのだけど、今日はコンビニバイトがお休みだから、お父さんと夕飯を食べることになっていた。

二人きりの家族なんだし、毎晩一緒にいらればいいんだけど、将来を考えるとそう

も言っていられない。できるだけ早く管理栄養士になる夢を叶えて、お父さんの老後と健康を支えるためにも、今は我慢するしかなかった。

週に一度の親子水入らずの夕食は、特別変わったこともなく、いつもどおりだった。古い造りの我が家にはダイニングルームなんておしゃれなものはない。茶の間に置いている、掛け布団を剥はがしたこたつの上に料理を並べた。

お父さんは私を料理上手だと褒め、作ったものを喜んで食べてくれるけど、褒め言葉にバリエーションがないから「うまい」としか言わない。

時々、お父さんが「うまい」とつぶやくのに合わせて、私が「ありがとう」と返し、合間にテレビのニュースで取り上げられてる政治や事件の話をして夕飯は終わった。

食後の片づけを終わらせて茶の間に戻ると、お父さんは呆けた顔で野球のテレビ中継を観ていた。

「お父さん、たまには晩酌ばんしやくでもする？」

「お、いいな。一本頼む」

私の提案に、お父さんはバツと顔を輝かせる。節約のためというよりも、お父さんの身体のことを考えて、私がお酒を飲まないようにきつく言っていた。

お父さんはお酒に弱いくせに好きなのだ。倒れたりはいらないけど、発泡酒一缶で酔っ払い、そのまま茶の間で寝てしまうこともしばしば。前に私のバイト中に飲んで眠りこ